令和４年度第２回岐阜市教育振興基本計画検討委員会 会議録

1　日　　時　令和４年８月１９日（金曜日）午後２時００分から午後４時００分まで

2　場　　所　みんなの森 ぎふメディアコスモス　かんがえるスタジオ

3　出席委員　玉置委員、尾関委員、青山委員、荒木委員、上松委員、
樋田委員、広瀬委員、福地委員、松岡委員

4　説 明 者（事務局）　水川教育長、佐藤事務局長、杉原次長兼教育政策審議監、野田次長兼教育政策課長、寺田教育統括審議監、吉元学校教育デジタル化推進審議監兼学校指導課GIGAスクール推進室長、星野義務教育審議監兼学校指導課長、児山教育政策課主幹兼教育政策係長、横井教育政策課副主査、櫻井教育政策課主任、山本教育政策課主任

5　次　　第
１　開会
２　委員長あいさつ
３　事務局説明及び審議
４　その他
５　閉会

○佐藤事務局長　それでは只今から、令和４年度第２回岐阜市教育振興基本計画検討委員会を開催いたします。よろしくお願いいたします。

本日は、岐阜大学の長谷川委員を除く９名の委員の皆様にご出席をいただいております。

初めに、会議資料の確認をさせていただきます。お手元のタブレットに次第及び席次表、資料１、そして参考資料１から４を収納しております。不足等がございましたら挙手をお願いいたします。

また、ご欠席の長谷川委員からは、本日の審議事項について事前にご意見を頂戴いたしましたので、参考資料４としてご紹介させていただいております。

本日の会議は公開で行います。傍聴者の皆様は、傍聴券裏面に記載した事項を遵守願います。会議の円滑な運営にご協力をお願いいたします。

以降の進行は、委員会規則第５条に基づき、玉置委員長に議長として進行をお願いしたいと存じます。それでは、よろしくお願いいたします。

○玉置委員長　皆さん、今回もご参加くださり誠にありがとうございます。

私は日頃、色々なところで教育関係者と話す機会がありますが、コロナ禍が３年目を迎え、教育の本質、今までやってきたことの是非、これからの未来に向けて子どもたちに育むべき力、これらが問い直

されています。

この会議は、今後の５年間の岐阜市の教育の根幹を成すものを皆さんで話し合っていく場です。ぜひ忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

今日は、特に計画の枠組みの全体像と基本目標の柱立てについて、時間をかけて話し合いたいと思いっております。前回は、皆さんの思いを順番にお話しいただきましたが、今日は私も間に入らせていただいて、少し事務局ともやり取りしながら意見を深め、より実りのある議論としていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、審議に入りたいと思います。本日、２つの審議事項がありますが、１点目についてまず事務局より説明をお願いいたします。

（事務局より、審議事項①に向けて説明）

○玉置委員長　ありがとうございます。それでは、今説明がありましたが、最初は順番に指名させていただき、ご意見をいただければと思います。必要であれば、途中でやり取りをしたいと思います。

事務局提案のとおり、計画の枠組み、そして基本目標の柱立ても含めたうえで、何か感じられることやご意見をいただければと思います。それでは、まず尾関委員よりご意見いただければと思います。

○尾関委員　私が気になっていることは、家庭・地域の柱の部分について、例えば、③、④とも文末が「つくります」となっています。確かに施策としては「つくります」なのかもしれませんが、家庭・地域自身がそのような場になるという表現の方が良いのではないかと感じました。

次に、学校・教職員についてです。先生方への負担は非常に大きいものがありますが、様々な項目がある中で、果たして先生たちがついていけるのでしょうか。教職員の方々の研修やサポートがあり、そのしっかりとした土台があったうえで、子どもたちの教育をしていくべきではないかと思います。

もう１つは、子どもと教職員の連携についてです。子どもの基本目標のために、学校・教職員の基本目標が６項目出ていますが、子どもの学びや育ちの部分について、教職員がそれらに取り組むことで子どもたちに育てたい姿が実現されていくという、両者の連動性がもう少し感じられると良いのではないかと感じました。

○玉置委員長　ありがとうございました。一点だけ、最初に言われた文末の表現について、結果として家庭・地域がそういった場所になるわけで、つくりますではなく、表現を改めた方が良いのではないかとのご意見でした。事務局として、いかがでしょうか。

○櫻井教育政策課主任　ご意見頂戴しまして、ありがとうございます。今回、家庭・地域の基本目標の柱立ての仕方として、それぞれの主体性を意識した書き方としましたので、今回の案では、つくりますという言い方をしております。誰が主体で、どこがその場所であるかを改めて考えるときに、この言葉がベストかどうかは、他とも表現を揃えてもう一度、検討したいと思います。ありがとうございます。

○玉置委員長　それでは続いて、荒木委員、お願いいたします。

○荒木委員　まず、この全体像のイメージについて、学校や家庭が子どもを支えていて、いずれここから地域へ、行政へつながっていくという流れが伝わってきて良いなと思いましたが、私が引っかかった点は、未来への扉を開ける力という言葉です。未来はもう開いているのではないかという思いがありまして、誰にとっても未来はあって、開けなければ次へ行けないのかというところで、力のない子を閉ざしているのではないかと感じました。

前回も、目をぎらぎらさせて取り組んだり、失敗を恐れずに取り組んでほしいという意見があり、開ける力というよりは、進む勇気、意欲、といったような希望を持てるイメージにすると良いのではと思います。力が要るとなると、どうしてもその差を感じさせてしまうのではないかと思いました。

それから、長谷川委員もご意見されていましたが、個を大事にすることと、私たちという集団を大事にするバランスを取っていけると良いと思います。私の体験ですが、テニスを始めたとき、レベル別に分かれているクラスとレベルを問わず一緒に練習するクラス、両方を体験しました。両方それぞれによさがあって、自分のレベルに応じて丁寧に教えてもらえる一方で、色々な方々と交ざり、それを見ながら覚える、この両方を行き来できることがとても意味のあることだと思いました。個に合わせてやってくださることはとても大事ですが、他の人たちと学び合うことが柔軟にできると良いと思います。

そして、自分がどこに合っているか分からない、または自分ができないことを認めたくない、自分ができていると思い込んでいる、あるいはもっとできるのに自信がないなど、選ぶことが難しい子どもたちもいるので、適切に選べるよう寄り添うことも大事な視点かと思います。

最後に、こちらも長谷川委員と同様ですが、家庭・地域の④について、子どもたちだけでなく、親や地域の方もワクワク学んだりほっとできる居場所をつくるというニュアンスが、ここに入ってくると良いなと思いました。

例えば、親がもっと気軽に、地域の方の話を聞きながら学んだり、協力し合える機会や場所があると良いなということを思います。子どもたちに限定せず、誰にとってもそのような場所であるというところが伝わる表現になると良いのかなと感じました。

○玉置委員長　ありがとうございます。現在、④のところにサードプレイスと書かれていますが、学校

でも家庭でもない、第三の居場所に公的な学びや支援の場を、大学もそうですが、地域と提携してつくっていくイメージかと思います。事務局から補足いかがでしょうか。

○櫻井教育政策課主任　ご意見ありがとうございます。玉置委員長がおっしゃったとおりで、地域、民間企業、大学と連携した、様々なサードプレイスの可能性があると思っております。

この中にはありませんが、例えばワクワク学んだりというところ以外にも、困難を抱えた青年層の居場所であったり、そういった観点も含めていく必要があると思っております。荒木委員がおっしゃったように、捉える範囲について広く含むものとしたいと思います。ありがとうございます。

○玉置委員長　荒木委員から未来を開く力について、もう未来は開いているのではないかという意見でしたが、これは根幹的なことで、その意見に対し上松委員は頷いておられましたが、いかがでしょうか。

○上松委員　子どもたちはなかなか自分の可能性に気づかないだけで、一人ひとりに未来があり、それを後押ししていくことが、学校そして教職員の役割であるということを思いました。

○玉置委員長　これに関連して、何かご意見ありますでしょうか。福地委員、どうぞ。

○福地委員　おそらく言葉があまりにもシンプルになり過ぎていて削ぎ落とされているので、イメージが湧かないのではないかなと思った次第です。子どももイメージできるような夢や幸せなどの言葉を補いながら、自ら扉を開ける力を、基本目標により具体的に表していくと分かりやすくなるのではないかと感じました。

○玉置委員長　ありがとうございました。それでは続いて、樋田委員、お願いいたします。

○樋田委員　特別支援教育に携わる者として見せていただいたときに、自分らしく生きる未来へという言葉は、とてもほんわかする温かい言葉だなと思いました。確かに、子ども一人ひとりが扉を開けるかどうかというのは難しい問題ですが、子ども自身が選択し進んでいくための支えになることができたら良いなと思っています。

教育大綱の学校・教職員の目指す姿にある、子どもも教職員もいきいきとチャレンジできるというフレーズは、本当に頑張れよと肩をたたかれているような気がしましたが、計画の基本目標を見ると、どうしてもため息が出てしまう印象を持ちます。次から次へと新しいことが起こっているので、シンプルにすることはなかなか難しいのかもしれませんが、何が大事なのかをまとめていただいたり、並べるに

しても、段階を踏むように示していただけると変わるのかなと思います。いきいきとチャレンジするためには、そのようなことも大事だと思います。できるだけ負担感が無く、チャレンジしたいと思うような内容になっていくと良いかと思います。

子どもたちを教えていて、先生たちは教育ＤＸに直面していますが、実際、子どもたちがこれから無数の情報の中で、それらを整理し使いこなして生きていくことを思うと、この流れは待ったなしだと思います。今後は、こういった情報活用の力が重視されるとともに、人だからこそできる相手と関わる力、相手を受け入れながら話を進めていく力についても大切にしていかなければと思います。

○玉置委員長　学校・教職員の基本目標６項目についても、精選してさらに段階を踏むように設けるというようなイメージでしょうか。

○樋田委員　全てを自分たちでという印象にならないような工夫があればと思います。これだけのことをやらなければいけないのかという小さなところに、目が行ってしまうのではないかと思いました。

○玉置委員長　ありがとうございます。では続いて、広瀬委員、お願いいたします。

○広瀬委員　お願いします。私も全体像の図を見て、とても分かりやすいと思いました。子どもが中心で、教育大綱が土台にあり、そこから成長軸があって、子ども中心に周りの大人たちが支えている構図に見えますので、全体像はとてもいいなと思いました。

事前の打合せの時には、学びの芽生えや幼児教育という文言が入っていましたが、本日の資料からはその言葉がなく、少し残念に思います。

ただ、幼児教育に対しても６つの基本目標はどれも当てはまるため、これらに漏れなく含まれていると理解することも可能かと思います。学校・園と表すなど、幼児教育も含めた印象を持てるよう工夫していただけると良いと思います。

他にも、確かな学力だったり、学びをつくるという表現がありますが、これらは幼児教育にも当てはまる言い方で、共感できます。また、心温かくや元気と安心に満ちたという表現は、とても温かい感じがして私は良いなと思いました。

あとは、家庭・地域の①で家庭での学びの充実を支援しますとありますが、誰もが学びでつながり合うという姿を意識した言葉選びをされていると思います。しかし、家庭によっては学びの充実までいかない、家庭や子育てそのものが十分ではない家庭もあるように思います。学びの充実だとハードルが高いですが、家庭教育の充実とすると、どの家庭にも当てはまるのではないかと思います。

○玉置委員長　ありがとうございます。事前説明の際は、幼児教育を取り上げた柱建ての検討もありましたが、その後の検討経過を事務局から、補足よろしいでしょうか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。委員長や広瀬委員がおっしゃるとおりで、これまで幼児教育に特に取り組んできたことから、当初は幼児教育について、象徴的に柱建てすることも検討しました。その後の検討の中で、広瀬委員がおっしゃってくださったように、基本目標の全てが本市の幼から高まで全てにかかるものであると考え、全ての段階にかけてこれらに取り組むこととして、このようにお示しさせていただきました。

○玉置委員長　当然、含まれてはいるという理解ですね。分かりました。関連して、家庭での学びの充実という言葉について、とりわけ家庭での学びというのはどういうイメージなのか、補足願います。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。まず上段の誰もが学びでつながり合うという姿に沿う、通じていくようにイメージを持っていましたので、学びという言葉を選びました。家庭教育学級や親子ふれあい教室、決めて守ろう！我が家のルール運動などもその子たちの学びの土台の部分と考えられますし、学びという言葉で、教育よりは少し柔らかい印象を出せないかという思いもありました。どの家庭も対象と捉えるよう、言葉の選び方についてはもう少し検討いたします。

○玉置委員長　参考としていただければと思います。それでは続いて、青山委員、お願いいたします。

○青山委員　まず計画の枠組みを見たとき、これならうちのお母さんが見ても分かるかなと思いながら見ていました。難しい言葉や専門的な言葉がなくて、分かりやすいと思います。

イメージ図をみたとき、学校・教職員と家庭・地域が離れたところにあり、それぞれが別々な感じを受けます。コミュニティ・スクールでいつも考えるのは、子どもを中心にして協働していくということを念頭に置いていますので、輪でつなげるなどすると、全体で子どもたちを守って育てていくという感じが出るのではないかと思っています。

次に、子どもに関してですが、私は横文字が苦手なのでアイデンティティという言葉はいるのかな、と思います。あと、これは極めて個人的な考えですが、毎日が元気で楽しいと聞くと、どこか退屈な人生だなと思ったりもします。このようなことを書くと、毎日が元気で楽しくない子はどうなのか、自分を追い詰めるように思わないかなどに気を取られ、個人的にはつまらない人生になっていってしまわないか、心配です。

学校・教職員についてですが、これも個人的な感想で申し訳ないですが、誰一人取り残さないという

言葉がよく使われますが、取り残された子どもとはどのような子どもなのか、少し上から目線な感じがして、あまり好きな言葉ではないですね。

家庭・地域に関しては、共に学び合うという印象が少し薄くなってしまっている感じを受けます。先ほども他の委員が言われましたが、私は、学校は子どもだけのものではなく、全ての人が成長する場だと思っています。コミュニティ・スクールに新しく参加した方は、１年間の学校運営協議会での活動を終えたとき、最初は子どもに何かしてあげるという気持ちで参加したが、活動を通して自分が成長させてもらったと必ず言う。そういった視点がもう少しあっても良いかなと思いますし、生涯学習にもつながっていくということも見えると良いのかなと感じました。

○玉置委員長　最初のイメージ図について、学校、行政、家庭、地域が繋がっているというイメージは、アイディアとしてぜひ参考にしてください。

それから、コミュニティ・スクールの文脈でおっしゃっていただいたことはとても大事な指摘で、共に学び合うことへの言及が弱いのではないかということですが、事務局としていかがでしょうか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。青山委員におっしゃっていただいたことは、大変重要なご示唆かと思います。上段の誰もが学びでつながり合うというところに、当然大人の学びもあり、子どもと関わる中で大人が学ぶこともイメージしていました。

ただ、やはりその言葉からそれが伝わるか、特に大綱で、学び・語り・支え合うという言葉がありますので、少し言葉のインパクトが弱くなってしまっている部分があります。もう少し社会教育の捉える範囲が子どもだけでなく大人も捉えたものと感じられるよう、再検討できればと思います。

○玉置委員長　１つ参考として、誰一人取り残さないという言葉についてですが、これは実はＧＩＧＡスクール構想において、文部科学省もこのように言っております。１人１台端末を実現することで、皆が学びをそれぞれの立場で豊かにしていくという大前提で、特別支援の子も自分に合わせてやっていく、さらに学びを進めたい子も自ら進めていけるなど、その子に合わせたという意味で書いてあります。
それでは続いて、上松委員、お願いいたします。

○上松委員　まず１点目、子どもの未来への扉を開ける力のところで、構成要素として３つ挙がっています。おそらく１番がベースになっていて、その上に２番、３番がつながっているイメージだと思います。何よりも人権教育、生命尊重の理解を大事にしたいという考え方は、とてもよく分かります。

そのうえでイメージ図を見ると、自分らしさと学びの力と健やかな心と体のバランスが、先ほど述べた考え方があまり見えず、少し合っていないなと思いました。他にも色々な位置づけがあり、複数のこ

とが表現されているので、限界もあるだろうとは思います。

２点目、委員長から話がありましたが、誰一人取り残さないというフレーズは、個別最適化を想起して使われている印象を持っています。ですので、③の柱建てだけにかかると考えると、言葉の持つイメージから、少し解釈が狭いかもしれないとは思いました。

学校・教職員の６つの柱建ては多いですが、今後考えていかなければならない必要なことが盛り込まれていると思います。そのうち③には、特別な指導、支援、ニーズを広く含むとありますが、私はそこに不登校への支援も入ると思います。不登校への支援は、意味的に誰一人取り残さないことにつながっていく大事な学びの機会として捉えられていますので、そう考えます。

３点目、④の自分らしさを伸ばし、可能性を引き出す学びをつくりますと書いてありますが、この内容は、いわゆる社会に開かれた教育課程の部分を表していると思います。学校教育だけでは限界があり、地域の教育力を活用しながら、カリキュラムをつくっていかなければならない部分です。そうであるならニュアンスが伝わりづらいので、自分らしさを伸ばしという表現について、地域の教育力を生かすことや地域と共につくっていくイメージをより強く出されたほうが良いのではないかと思いました。

４点目です。家庭・地域について、家庭が１つ、地域が３つです。家庭に対する目標は、本当にこの１つでいいのかと強く思っています。家庭に迫るべき他の内容はあってもいいのではと思います。

５点目、これは話の大元についてで申し訳ないですが、基本目標の柱建ての構成について、少し違和感を覚えます。子どもの未来の扉を開けるために、学校・教職員、家庭・地域が取り組む。基本目標の子どもとほかの２つはカテゴリー、段階が違うように思います。その子どもの姿を目指すために、学校、教職員、家庭、地域がどうあるかを定めるのであれば、子どもの柱建てには、施策が紐づかないと思います。ですので、同じ段階の目標として柱建てするには少し無理があるのではないか、そう感じました。

○玉置委員長　ありがとうございます。非常に重要なご意見でして、子どもの柱建てと学校・教職員、家庭・地域の２つの柱建ては段階が異なり、施策は、子どもの掲げる姿を目指す後者にのみ紐づくのではというご意見でした。現在の上松委員の意見について、子どもと大人が同じレベル間ではないのではないかというご意見でしたが、事務局いかがですか。

○櫻井教育政策課主任　この点については事務局内でもかなり検討がなされました。当初は、子ども、学校・教職員、家庭・地域のそれぞれに施策をぶら下げて、プロットしていくようなイメージを持っておりました。

しかし、今回ご提案する形は、上松委員がおっしゃったとおり、子どもの自分らしさ、学びの力、健やかな心と体というのは、１つ上段にある姿として、それを実現していくために、学校・教職員、家庭・地域が基本目標に従って、このような施策を取り組んでいきます、子どもたちにそういった機会、

場所、学びを提供して、子どもがそれに向かって取り組んでいきますといった構図で考えています。学校・教職員と家庭・地域のそれぞれにオレンジと緑の囲みがあると思いますが、ここにそれぞれの基本目標が並び、さらにそれに紐づく施策が連なる形を考えています。すみません、少し説明が不十分だったかと思います。

○玉置委員長　今事務局より補足がありましたが、少し話題にしたいと思います。皆さんは、どう捉えますでしょうか。ご意見ありましたらどうぞ。松岡委員、お願いいたします。

○松岡委員　このように子ども、学校・教職員、家庭・地域を並べたとき、子どもの立場に立ってみて、君たちはこれから確かな学力を持って自立的に学ぶ力を持ちなさいと言われて、子どもがどう思うか考えたとき、そんなこと言われてもとか、大きなお世話だと思う子も多いのではないでしょうか。子どもによってはプレッシャーになったり、画一的にも取られてしまうのではと思います。

　だから、皆さんの話を聞いて、子どもの姿を大人と同じ段階に並べてしまうのは少し怖いなと思いました。計画の子どもの柱建てはこの姿にあてはめるためのものではなく、大人が願う子どもの姿であり、そこに向かって大人がどう取り組むかだと思います。

○玉置委員長　ありがとうございます。荒木委員、どうぞ。

○荒木委員　上松委員の意見は、私も感じていた違和感を説明してくださったように思います。事務局の説明を聞くと、これはきっと立体構造で、上段に位置する子どもが未来へどんどん進んでいけるよう、学校、行政、家庭、地域がスクラムを組んで支える、そして子どももいずれ大人になって戻ってくる、循環する形なのだろうなと思いました。

　また、松岡委員の意見をお聞きして、確かに自己責任を突き詰めていくと孤立する人が増えることもあり、目標に執着しない、無理に押し付けない、自由もあると良いなと思いました。

○玉置委員長　ありがとうございます。事務局からの補足説明と他の委員からもご意見ありましたが、上松委員いかがでしょうか。

○上松委員　子ども、学校・教職員、家庭・地域、この３つが横並びでそれぞれに基本目標を充てる構図が、私はどうしても少し違和感があります。こういう子どもを育てたい、なってほしいという中で、学校・教職員、家庭・地域が目標を持って取り組んでいくという構図なら、理解ができます。

○玉置委員長　荒木委員が先ほど言われた、同じ平面ではない立体構造的な構図をお考えということですね。ちなみに、私自身はこうなってほしいという子どもの姿を明確にして掲げていくことは、悪いことではないと思っております。

○上松委員　私もそれについては、反対していません。

○玉置委員長　そこは大事な点で、追い詰めるようなものではなく、子どもたちにこう育ってほしいという姿を明確に持ち、示しておくことが大事かなと思います。それでは続いて、福地委員、お願いいたします。

○福地委員　私も今、事務局の説明を聞いてようやく分かりました。正直、これが計画の全体像を俯瞰した構造図なのか、それとも何か動きを感じるような成長のイメージを描いた構造図なのか、その意図するところが分かりづらいのですが、先ほどの荒木委員の解釈を聞いて私も同感でしたので、事務局としても、それを念頭に修正を検討されると良いのではないかと思いました。

今回の検討委員会において、我々は次世代の岐阜市の教育の枠組みをつくるという非常に重いミッションを受けているのだと、改めて感じています。これまでの教育立市の柱としての取組みを今後さらにどう展開していくのか、非常に過渡期であるように思います。水川教育長が新たに就かれ、何か教育の理念、根底に流れるベースといったものがどのように変わっていくのか。学校現場や保護者、あるいは県内の他市町村も、この岐阜市の教育振興基本計画を注視しているのではないかと思います。

今回、学校ミーティングの実施とともに、計画の在り方そのものに関しても中学生と共に考える機会を持つなど、色々なチャレンジをしているように思います。

事務局としてもまだ意見を聞きつつ検討している段階だと思いますが、この計画の中に筋を通そうとしているフィロソフィやコンセプトを計画に落とし込みながら、学びの主体者としての子どもの成長のために大人が取り組んでいく形にしていくと、整理できるのではと思います。

基本目標の柱建てですが、子ども、学校・教職員、家庭・地域それぞれが、先ほどの段階の違いを意識すると、まだ統一されていない印象を持ちました。また、子どものところで言えば、アイデンティティだけ英語で書かれていたり、チカラが片仮名であったりするのも、少し分からないです。何かねらいがあるなら説明が必要ですし、必要なければなくても良いかと思います。

次に、子どもの②のところで私の未来を描くと書かれていますが、描くだけでいいのかなと思いました。やはり、自分を幸せな人生の主体者として、プロデュースしていくイメージの方が良いのではと思いながら、読ませていただきました。

次に、学校・教職員のところですが、今日が楽しく、明日もまた来たくなる学校ということで、これ

もよく言われるフレーズですが、みんなで一緒に遊んで、楽しいことがあるからまた来たいねといったようなニュアンスではないと思います。今が楽しく、そしてこの今が夢のある未来につながっている、そんな実感があったときに、明日もまた学校に来たいと思うのではないかと思います。自分の未来につながる何か楽しいことがある、新たなことが分かり、ときめき、ワクワクする。そんなニュアンスが、今日が楽しく、明日もまた来たくなる学校というところと、その下に書いてある構成要素のところからは少し読み取りづらいのではないかと思いました。

先ほど、樋田委員が人間だからできる関わり合いということを言われましたが、私は、非常に共感しました。テクノロジーやアート、例えば、ふるさと岐阜市学「ぎふＭｉｒａｉ」の内容はまだよく分かりませんが、そこに込められた岐阜にゆかりのある人の技術や芸術、文化から、豊かな感性や心を育て、夢ある未来につながる子どもの将来を考える、そのような側面も感じられると良いのではと思いました。

私は大学で、特活や総合的な学習の時間について担当していますが、協働・探究的な学びがこれから主流になっていく中で、共に協働し合うこと、追究し合うことを仲間との学び合いという一言に片づけず、言葉として浮かび上がらせていただけると良いかなということを思いました。

○玉置委員長　ありがとうございます。樋田委員、人間だからこそのくだりや探究に関するご意見について頷いておられたので、もし補足があればどうぞ。

○樋田委員　ありがとうございます。ＡＩによる自動翻訳が登場し、英語教育はこれからどうなっていくのだろうと考えたとき、やはりこれからは、ＡＩでは及ばない相手の文化的な背景や考えに思いを寄せた、人としての関わりを柱にした英語教育が大事だと思いました。そのうえで、協働的な学びにおいて人と関わり学び合うことは、つい個別最適化の文脈の中で蔑ろにされがちですが、重要だと思っております。

○玉置委員長　ありがとうございました。様々な視点でのご指摘がありましたが、事務局どうですか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。福地委員がおっしゃっていただいたところで、柱建ての各項目を補足する説明が不足しておりまして、ここにもう少し①から⑥に掲げた理念を補足するような説明が入っていくかと思います。基本目標の一文だけで全てを表現することは難しいので、この目標に込めている意味やねらいといった部分を補足していきたいと思っています。

また④の子どもたちの可能性を引き出すという点において、ふるさと岐阜市学「ぎふＭｉｒａｉ」は、地域に点在する教育資源を活用して子どもたちの可能性を引き出したり、自分らしさを伸ばしていくものであり、学校・教職員と家庭・地域の双方に跨るものと考えられます。ここにもう少しつながりを感

じられるような工夫ができないか、今皆さんの意見を聞いて思ったところです。ありがとうございます。

○玉置委員長　福地委員の指摘は、基本目標の下の矢印の文章が短すぎて、もう少し分かりやすく丁寧に補足するということで良かったでしょうか。

○福地委員　書きぶりそれぞれでディメンションが違う感じがします。また言葉遣い、長さ、文末もまちまちなので、精査していけると良いと思いました。言葉はやはり命なので、イメージに合う言葉、岐阜市が大事にしている精神や理念の価値が表れる言葉を書き込めると良いと思いました。

○玉置委員長　分かりました。それでは続いて、松岡委員、お願いいたします。

○松岡委員　まず、家庭・地域の①、家庭での学びの話についてです。家庭での学びの充実と聞くと、家で子どもが勉強することかなと一瞬捉えてしまいがちですが、下の補足を見ると、これは親学びのことだなと分かります。ＰＴＡ連合会の会長も親学びという言葉をよく使っていますので、ここは親学びの方が分かりやすいかなと思いました。

また、学校・教職員や家庭・地域の補足説明はある程度具体的に書いてある印象ですが、子どもについては少し概念的で言葉が難しいかなと思いました。特に最初の②の自律的に学ぶ力、これは自分で勉強できる子になることかなと一瞬思いましたが、自律的という言葉を調べると、自身で調整を行ったり問題解決を行うさまと書かれていました。これは自分から学び、問題を解決しようとする力を育むことかなと思いましたが、子どものところに入れるには言葉が難しいなと感じますので、もう少し分かりやすい言葉が良いのではないかと思いました。そして、確かな学力という言葉も、テストの点が良いイメージを持ちそうですが、これは知識を深めてそれを活用する力のことかと思いますが、具体的な言葉でもう少し分かりやすい方が良いと思いました。

皆さんの議論を聞いていて思うのは、例えば家庭でのトラブル、または友達とのトラブルなどにより、子どもたちの生活や勉強が妨げられてしまうのは望ましくないと思っています。親学びをしたり、色々と困ったときに地域に逃げ込む場があると良いと思います。子どもがその子らしく育つということが上段にあり、その土壌をしっかりしたら子どもが芽を出して育つというイメージで、大人が頑張った結果、子どもがこういう姿になっていく、そんな表現の仕方が良いのではと思いました。

○玉置委員長　ありがとうございます。ここまで、各委員よりそれぞれご意見をいただきましたので、私からも少し述べさせていただきます。

まず、子どもの未来への扉を開ける力となるこの３つを見て、率直に何かおとなしい子どもを育てる

ように思いました。何か躍動感がなく、おとなしいイメージに留まってしまうので、もっと色々な課題に興味を持ち、探究するようなイメージを持ってほしいと思います。

経済産業省が出した未来人材ビジョンでは、自身で課題を見つけて自ら育つ、そんなキーワードのもと、まさに探究を最前面に打ち出しています。

私は、ふるさと岐阜市学「ぎふＭｉｒａｉ」をもっと前面に出して、子どもたちは徹底的に探究する、学校・教職員がそれをサポートし、家へ帰っても、地域でも学びが連続している。そんな大きなコンセプトを描いて柱にすることで、新しい未来をつくったり、社会に関わっていく子どもを育てられると思いますし、新しい施策を打ち出していくにも良いのではないかと思います。

皆で一体となって、岐阜市の今のことも未来のことも考えていく。こうあるべきだと考える子どもを育てる中で、政治や地域にも関心を持っていくと思います。私は、非常に探究的な学びに魅力を感じているので、それをもっと取り上げても良いかなと思います。

最後に細かいことですが、子どもの①と②、「今を生きる、」「私の未来を描く、」これらに読点がありますが、何か意図があるのか正直分かりかねたので、お聞きしたいと思います。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。正直申し上げますと、そこまで考えが及ばず、特に何かを意図しているわけではございません。もし何かご示唆があればいただければと思います。

○玉置委員長　そうでしたか、分かりました。さてここまで順番にお話しいただいたところで、各委員のご意見を聞いて思うことがありましたらどうぞ。福地委員、お願いいたします。

○福地委員　玉置先生が話された後で申し訳ないですが、教職員のサポートに関する話が印象に残っています。確かに、子ども同士が認め合い、探究し合う学びと、教職員集団の同僚性として、お互いに学び合うことは、相似形と言われます。教職員が育たなければ子どもは育ちません。どんな教職員集団を目指していくのかについて、ＤＸや働き方改革など施策ベースでやることが羅列してありますが、教職員のやりがいや笑顔をつくる、そんなフレーズがあっても良いかなと思いました。

○玉置委員長　ありがとうございます。確かに同僚性は大事ですね。うまくいっている学校は、先生たち同士で困ったと言い合えますし、良いことも共有できる。これらができる雰囲気の集団は、やはり違ってきますね。

その他よろしいですか。なければ次へ移りたいと思います。それでは、これより審議事項２に入りたいと思います。では再度、まず事務局から説明をお願いいたします。

（事務局より、審議事項②に向けて説明）

○玉置委員長　ありがとうございます。少し専門的な言葉も出てきていますので、まず質問を受けて整理していきましょう。イメージは湧きましたでしょうか。素朴な質問でも結構です。いかがですか。樋田委員、どうぞ。

○樋田委員　基本的なことが知りたいです。先ほど、可能なものについて定量的な評価を行うとありましたが、例えばどのようなものが今のところ考えられているかどうか、教えていただけますか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。まず補足として、積極的に定量的な評価を用いていくという書き方ですが、この計画に紐づく全ての施策に一律定量的な評価の指標を置くということを意図するものではないと考えています。当然、置けるもの置けないものがあると思いますので、置けるものに積極的にその評価も用いていきたいという方向性を今持っているところでございます。

基本的に定量的な評価ができるものといたしましては、例えば何かの回数、人数、アンケート評価値、割合などのパーセントなどがまずは考えられると思っています。

正直、この施策でどれだけの効果が出たのかを端的に数字で測れるものは、今はあまりないと思っています。翻って言えば、回数が達成されること自体が目標になってしまうような点検評価になることを、事務局としては危惧しています。

これまでの本市の事務点検評価委員会において、長谷川委員もおっしゃってくださったのですが、一つ一つの施策に対して、事務局から丁寧な説明を尽くして、それに対してどうしていけばいいのかを委員会の中で毎回議論しております。当然、そこは今までのように丁寧に尽くしながらも、そのうえで可能なものについては今後、客観的な根拠として何か数値的な評価指標も併用していくことができないか、模索しているというのが正直なところでございます。

○玉置委員長　よろしいですかね。余談ですが、私がかつて愛知県教育委員会にいたとき、きめ細かい教育を担当することとなり、１年後にはどれだけきめ細かい教育が進んだか、パーセントで示してくれと言われました。私は素直に、それは無理ですと答えました。すると、あなたは教育行政を分かっていないと怒られましたが、正直にそれは出せないです。そして出せないものは、無理して出さないということだと思います。他にいかがでしょうか。荒木委員、お願いいたします。

○荒木委員　例えば、「特別な配慮が必要なお子さんへの支援」を考えたとき、「何人に発達検査を実施し、相談窓口に連れて行けたか」だけでは、やはり間違った定量評価だと思います。意味のある支援

として評価するには、保護者が「うちの子に何か支援をしてほしい」と思い、本人に「もう少し何か違った形なら自分はもっと頑張れるかもしれない、私のよさをもっとみんなに見てもらいたい」という気持ちが伴っていたかまで、確認する必要があります。数で出すことは確かに大事ですが、指標の性質そのものが慎重に吟味されなくてはならないと思います。

データ処理に関して私は詳しくないですが、心理士の研究などであれば、グラウンデッド・セオリー・アプローチというような、目的に合わせて話を聞くことにより、どんなつながりや変化が起きているかを調べる手法もあったりします。何か１つの数字を出すのではなく、それがどう関係し合っているかを見られたり、追えたりすると良いと思います。変化を見せるため、無理に数の変化を探すようなことがないよう、教育の本質を踏まえた良いやり方を考えていけると良いと思いました。

○玉置委員長　数字だけが独り歩きしないというようなことも含めてのご指摘であったと思います。事務局はいかがでしょうか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。これも先ほどの説明の補足となりますが、スライド２１において、５年間の変化・経過を把握し、継続的な改善に反映ということを書かせていただきました。

現行の事務点検評価委員会を振り返ったとき、実施報告を作成する際、どうしても視点が単年分の評価に終始しがちな側面もあり、これは定量的・定性的な評価を問わずですが、この５か年でどんな変化、経過があったかに着目したいと思い、このように書きました。

おっしゃっていただいたように、たくさん話を聞き、色々なことを把握していく中で、この５か年の変化の中に子どもたちの姿、また子どもに限らず、学校や地域の方の姿にどんな変化が生まれてきたのか、それを感じられるように評価の仕方を考えていくことがまず方向性としてあるのかなと、今委員の皆様のご意見をお聞きして思った次第でございます。ありがとうございます。

○玉置委員長　　それでは続いて、広瀬委員、お願いいたします。

○広瀬委員　先ほどから出ている評価に関して、子どもの育ちは数字では表せないところがあります。

例えば、逆上がりが何人できるようになったかということなら単に数値で表せますが、そこに向かう気持ちだったり、結果できなくても頑張ろうとする気持ちが育まれていったことに、大きな育ちがあると思います。しかし結局、結果はできなかったにカウントされてしまうので、こういった数字では表せない難しさがまずあると思いました。

単純な質問ですが、中学生とのオンラインでの意見交換について、子どもたちの意見を取り入れられるすばらしい取組だと感じましたが、参加した中学生はどう選ばれているのでしょうか。

これまでも教育公表会などで、子どもたちが立派に発表している姿を拝見しましたが、このような場に参加している子どもたちはすごく積極的なのかなとも思います。本来は、積極的に意見が言える子どもだけでなく、もっと色々な子どもたちの意見が取り入れられると良いなと思います。

宜しければ、今回どのような子どもたちが参加されていたのか、少し教えていただければと思います。

○玉置委員長　２つありましたが、１つは定性的な評価に資するいわゆるエピソードをどうやって集めるかについてどう考えているかということ。そしてもう１つは、意見交換に参加した中学生についてですね。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。正直、具体的にエピソードをどう集めるか、明確な案はまだ持ち合わせておりません。

ただ、実際に事務点検評価を通して、報告書を作成し議会報告を行いますので、その報告書を当然、文面として起こしていく段階で学校や幼稚園、または家庭、地域などでどんな姿や変化が生まれているか、事務局各課が施策や事業を通じてそれらを把握していくことが必要だと感じています。今後、事務局でも検討してまいりたいと思います。

○玉置委員長　もう一点、オンライン意見交換会に参加した中学生についてもお願いいたします。

○児山教育政策課主幹　各中学校から１名お願いしますということを先にお話しさせていただきました。そのうえで、今回はテーマがデザインでしたので、そこに関してアイディアを出せそうな子をお願いしました。かつ、今回はオンラインでやりますので、家庭で自ら取り組むことができる子どもを選んでいただきました。

○玉置委員長　学校でどうやって選んでいるかは明確ではないですね。ちなみに、このオンライン意見交換会にうちのゼミ生が参加させていただき、その様子を書いていましたので、紹介します。

「市内中学生２１名と大学生で意見交換を行いました。岐阜市教育振興基本計画は５年に一度見直しが図られ、来年度からまた新たな計画がスタートします。

教育の主役は何といっても子どもたち。一人ひとりの未来づくり工房である学校とその学びをより良いものにすべく、教育振興基本計画を子どもたちと一緒にデザインする、その思いを私は感じました。

私が担当したグループの中学生はとても意欲的。たくさん発言し、頷き、互いの意見をこちらが何も言わずとも深め合う姿に感動しました。誰に何をどう伝えるのか、この３点を逃がさず捉え、自分なりの意見を伝え合う中学生を見守りながらも、みんなの素敵な意見を頭の中で整理することに私は必死で

した。それほどまでにスピーディーで、次から次へ飛び出すアイディアや多角的な視点は、まさに教育の主役だと感じさせるものでした。」
以上、参考までにご紹介させていただきました。

○児山教育政策課主幹　先ほどの補足ですが、このオンライン意見交換会のほか、学校ミーティングの実施報告につきましても、参考３にてご紹介しております。またご覧いただければと思います。

○玉置委員長　では続いて、福地委員、お願いいたします。

○福地委員　私も以前、県教育委員会で評価に関わったことがあります。ビジョンを策定し、それを評価するのですが、どうしても評価のための評価になりがちで、何とも言えない空虚感を味わいながら取り組んだ記憶があります。先ほどの事務局の話を聞くと、腐心しながらやっている様子が感じられ、共感できました。

当然、評価としてはしっかり行っていかなければいけません。しかし、先ほど説明にあったように、今後の教育の展開を考えると、やはり子どもの頑張り、子どもの努力の裏打ちがあって成長したことがあるわけで、計画だけを子どもに分かるようにするのではなくて、そこでさらに頑張った子どもたちへのねぎらいも、評価の中で返してあげられると幸せだなと思いました。

また、予算いわば税金を原資に事業を行うわけですので、その費用対効果なども示していく必要性があると思いますが、先生方も含めて、評価をやったことで本当に頑張ってよかったと認めてもらえたり、次への一歩の勇気になるようなメッセージを込めた評価として、何か工夫があるといいなということを思いました。

それから、５年間の変化を考えたときに、毎年度やりますが、中間地点で何かポイント、重点を置いた見届けのようなものがあると分かりやすくなるかと思います。その評価をもとに、そこからさらに後半期間の取組みを進めていく仕組みです。ただ、学校現場に評価のためのデータ提出を過度に求めることは負担なので、やり方を考えながら、徒労感のないようううまく行っていただけたらと思います。

もう一点、５年間の長期展望を持つことについて、小学校１年生に入った子が小学校５年生になるわけです。私はかつて、途中一時的に離れてはいますが、小学校１年生で入学してきたときから中学校３年生での卒業までを見届けた子どもたちがいます。その子どもたちが９年間をかけて成長してきた姿は本当にすごいと思います。年度ごとの出来事も大事ですが、こうした子どもの成長や変化は、この教育の成果であるといったメッセージを、子どもの言葉や姿とともに表せると良いなと思いました。

最後になりますが、学校ミーティングの実施報告を読ませていただき、素敵だなと思いました。私もこっそり子どもになって受けたいなと思いながら聞いていましたが、その中で、子ども自身が自分たち

で決めることや自分たちで選択することを高らかに言っています。ここが何か一つ、今後の展開の肝かなとも思いました。

ただ、自己の深い考えや知識をもとにした考え方と、自分のやりたいことをやればいいというような短絡的な考え方を踏み違えてしまうと、非常に残念に思います。さらに、学校のことに関しても、相手と関わり合意形成しながら何かを決定していくその繰り返しの中で、この学校は私たちの学校だよという自意識が生まれ、先生ではなく子どもたちが進めていく文化ができていくのではないかと思っております。

○玉置委員長　重要な点を述べていただいたと思います。評価においても、子どもたちの姿をしっかりと把握しながら行っていただきたいという趣旨だったと思いますが、事務局としていかがでしょうか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。計画策定に子どもたちも関わってくれていますので、子どもたちにも伝わる形にしていくことができたらと思っています。

また、評価において子どもの姿をしっかりと捉えること、そして長期的な視点に立つことの大切さを改めて教えていただいた気がしますので、しっかり心に留めたいと思います。ありがとうございます。

○玉置委員長　ありがとうございます。関連して評価の関係で、よろしいですか。どうぞ、荒木委員。

○荒木委員　この評価は、子どもの変化ではなく、施策の評価をするのですよね。そうすると、先ほどの私の例でいうと、発達障害の子どもを支援するためにどのようなアプローチをどれくらいしたかという、定量評価ができます。学校現場の手ごたえや子どもたちの感じ方等の変化は、様々な施策の結果であって、施策の評価ではありません。この計画が誰に向けた、何を目指したものなのか整理しないと、取ろうとしているデータが、何を評価するためのものなのか、分からなくなるのではないかと思いました。

また、現行計画が読みにくいという課題があるようですが、それがデザインのせいであるならば確かに見た目の問題です。けれど、構成の問題であるなら、企業のようなプレゼンの仕方で、結論から述べて、理由が後からついてくるような書き方等で工夫する必要があります。子どもたちに読んでもらうのであれば、子どもにこうあってほしいという理想の提示ではなく、「大人は、どの子どもにも、こう向き合うよ」というメッセージとして伝えることが大事だと思います。

それらが明らかになったうえで、この計画をどのように策定すればよいか、そしてどのように取組みを評価していくかがはっきりしないと、結局、多くの人に伝わらないものになってしまうと思います。

○玉置委員長　荒木委員からご意見ありましたが、事務局にもう一度整理していただきましょうか。

○櫻井教育政策課主任　ありがとうございます。荒木委員は、審議事項の２点を関連させてお話ししてくださったと思います。２点目の事務の点検評価とは、荒木委員のおっしゃるとおり、この計画に基づく施策ないしは事業といったものを評価していく仕組みでございます。なので、事務点検評価委員会でやることは、この計画に定めた基本目標やそれを達成していくための施策、事業がどのように行われたか、どんな成果が出ているかを評価、検証し、改善に繋げていくことです。

その評価の仕方として、数値が増えたなどそういったことが客観的な評価指標としてまず考えられますが、教育についてはそういった客観的な数値で評価することが難しいという話もあるわけで、だから先ほど皆さんがおっしゃってくださったような、取組みを進めていく中で、子どもたちや学校の中に生まれてきた変化や成長などの経過をしっかりと追い、このエピソードを成果として書き込み、先ほどの客観的な評価指標と併せて、両点で施策の評価、進捗確認をしていければと考えております。

また、計画の形態についての話ですが、子どもたちと一緒に考えたことのねらいは、教育の主役は子どもであるという前提のもと、本市の教育をオール岐阜でつくっていくと考える中で、認知度があまり高くないこの計画を、皆さんにより分かりやすく、親しみあるものとして伝えていくことにあります。そして、少しでもそういった姿に近づいていくための一取組みとして、先ほどのようなご提案をさせていただいた次第でございます。

○玉置委員長　つまり、子どもたちの成長や変化を成果として示せるよう、しっかり把握していくことを考えている。また、計画を広く市民の皆さんのものとしていきたいという思いの中で、子どもたちにも分かる、ひいては誰にとっても分かりやすい計画を目指すための取組みとして、先ほどのような意見交換を行っている。そして、計画の形態の話と評価の話は別であって、何も評価について子どもたちと一緒に実施するというようなわけではないということですね。

○櫻井教育政策課主任　審議の中でこの２点を同時に取り扱いましたので、色々と説明が混同してしまった点があるかと思います。申し訳ございません。

○玉置委員長　よろしいでしょうか。それでは続いて、尾関委員、よろしくお願いいたします。

○尾関委員　私は企業に身を置いているので、評価において、どうしても見えないものを評価することのイメージがつかないです。行動に落とし込んで、行動ができたかどうか、それが目に見える形でないということが、非常に不安が残ります。

また、評価の体系図に書いてある達成したい姿、これが子どもに望む姿、未来への扉を開ける力としての①～③だと思いますが、「今を生きる自分らしさを大切にします」ということが達成したい姿かというと、①を大切にすることによってこうなるという姿がまた別にあるように思うのです。それがなければ、果たして子どもたちがそのように成長したかどうか、見られないのではないかと思います。だから、この子どもの①～③をどの段階に位置づけるのか、先ほども議論になりましたが、子どもと学校・教職員、家庭・地域の立ち位置はやはり段階が異なるという意味では、施策を打つ、施策に取り組むことによって子どもたちにどう成長してほしいか、それが扉を開ける姿なのか、挑戦的な何かチャレンジングなことなのか、もう少し達成したい姿が具体的に、明確にあるべきだと思います。

子どもたちにとっても分かりやすい計画を打ち出すことも大切だと思いますが、そもそもこの教育振興基本計画が誰のためのものか、誰に施策をしていただくものなのかがあり、そのうえで子どもたちの達成したい姿をどう導いていくかが趣旨にあると思いますので、あまりそちらに寄り過ぎてもどうかと正直感じました。

○玉置委員長　ありがとうございます。最初に言われたことをもう一度確認したいのですが、達成したい姿が、先ほどの子どもの姿でははっきりしていないのではないかということですかね。

○尾関委員　そうですね。例えば、笑顔が溢れるということが姿としてあるのであればイメージがつくと思いますが、今を生きるみんなの自分らしさを大切にしますというものが、大切にすることによって子どもたちの姿はどうなるのでしょうか。また、学びの力を身につけることによってどんな姿になるのか、それがないのではないかと思いました。

この体系図に沿って評価を行うにあたり、達成したい姿、未来の扉を開ける力が根本の達成したい姿であるのならば、それを構成する要素は、もう少し言葉を変えられたほうがもっとイメージしやすいのかなと思います。実際に評価しようと思っても、行き着くゴールのイメージ、子どもたちの姿だと思いますが、それが少しぼやけてしまっている気がします。

○玉置委員長　ありがとうございます。つまり、この文言だと評価ができないのではないかなということですね。関連して何か思われることがあればと思いますが。水川教育長、お願いいたします。

○水川教育長　今の尾関委員のご意見は、事務局としても迷っていたことに対し的確なご指摘をいただいたと思っています。また、審議事項①における全体イメージ図に関しても、どのように描こうか迷っているところについて、委員それぞれの視点からご指摘いただけたと思っています。

この教育振興基本計画の目的は、玉置委員長もおっしゃられたように、躍動感あふれる未来をつくれ

る子どもを育てることにあると思います。私は教育長として、この振興基本計画のベースは学校や幼稚園は何のためにあるのか、子どもたちは何のために学校や幼稚園に通うのかにあり、それをいつも考えています。賢くなるため、優しくなるため、健康になるため、そう言うことは簡単ですが、なぜ、何のために、賢く、優しくならなければいけないのか。そう考えたとき、子どもたちは、賢く、優しく、たくましくなるために勉強するのではなく、未来をつくるために学校へ来ていると思うのです。

世界に一つだけの自分の未来をつくるために、子どもたちが学校に通っていると思うと、先ほど各委員もおっしゃられたように、大人がその子の未来をつくれるかといったらそれは絶対にできない。大人が未来をつくるのではなく、子どもが未来を自分でつくっていけるように支援をして応援をすること、それが学校・教員、家庭・地域の役割です。その役割を通じて、子どもが自分でつくっていこうとする未来、その未来への扉を開ける力を育てる、もしかしたら扉はおのずと開いていくのかもしれませんが、そのようなことを考えながら、振興基本計画をつくりたいと思っています。

本日の各委員のご意見は、私たちの足腰の弱いアキレス腱にあたるところを鍛えていただけたと思っていますし、私の中でも考え方が大変明確になりました。この全体イメージ図についても、真ん中に子どもを置いている割には、どんな子どもを育てたいのか、未来への扉を開ける力と書いていながら、①～③では明確になっていないということだと思います。

どういう子どもを育てたいかというと、教育委員会としては、自己肯定感があると子どもながらに思える、そんな子どもを育てたいです。また、先ほど福地委員はじめ多くに委員がおっしゃられたように、夢の溢れる子どもに育ってほしいです。こうした、自己肯定感や溢れる夢を絶やさないようにしようと思えば、その実現を支える確かな学力と探究の力は絶対必要だと思っています。これらのことを子どもの①～③のところで、自分が好きな子、夢いっぱい溢れる子、確かな学力があって探究の力を持つ子を育てたいと打ち出し、そのために学校で何をするのか、家庭や地域は何をするのか、この構図をベースにもう一度再構築したいと思っています。

もし、ビジョンの描き方として少し違うのではないかというところなどありましたら、ぜひ委員長も含めて、ご意見をさらにお聞きできればと思います。

○玉置委員長　皆さんいかがでしょうか。教育長が今までの私たちの議論をまとめていただいたように思います。ありがとうございました。そして、私も教育長が言われたような形で、整理されていくと良いのではと思いました。

本日は本当に良い議論ができたと思います。各委員の皆様、誠にありがとうございました。

それでは最後に、次第４その他といたしまして、事務局より連絡事項をご案内いただき、その後進行を事務局へお返しいたします。

○野田次長兼教育政策課長　事務局より、次回の会議についてご案内させていただきます。次回、第３回の検討委員会につきましては、１０月４日火曜日、１３時３０分から市庁舎６階の６－１大会議室にて、開催したいと考えております。詳細につきましては、後日改めてご連絡させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○佐藤事務局長　皆様、本日は長時間にわたり、貴重なご意見ご示唆を賜り、誠にありがとうございました。また、玉置委員長におかれましては、議事の補足をしていただき、ありがとうございました。

皆様から本日いただいたご意見は、教育長が申しましたように、事務局で改めて整理させていただき、次回の会議でまたお示ししたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。委員の皆様には引き続き、本計画の策定にお力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

それでは、以上をもちまして、令和４年度第２回岐阜市教育振興基本計画検討委員会を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。